

ネパールに病院設立、医療の原点がそこに

小倉 健一郎氏
相原第二病院整形外科

主な国際医療協力経験

1998年……ネパール（AMDAネパール子ども病院開院）
2008年……中国（四川大地震救援）



中国で、現地の医療コーディネーターと共に。

いう。後に神戸の悲惨な状況がその後も長く続いていくと知り、「助けに行けばよかった」と悔いた。

震災によって甚大な被害を受けた神戸市長田区に、最も早く駆けつけたのが岡山県のNPO法人「AMDA」に属する医師だと知った小倉氏は感銘を受け、同年AMDAに登録。98年にはAMDA兵庫支部を立ち上げたが、同支部は阪神・淡路大震災時に支援の手を差し伸べてくれたネパールに、病院をつくるための活動母体となった。

AMDAネパール子ども病院が98年に開院した際はベッドさえ不足した状態だったが、現在は約100床を擁し、ネパール唯一の周産期病院として機能している。最初の5年間は日本から資金面・人材面での援助を行ったものの、6年目を以降は現地スタッフに任せ、運営は軌道に乗っている。

「年間3000件の分娩を手がけ、出産で亡くなる母子を減らすことに貢献しています。地域に欠かせない病院になりました」。開院1年目に3ヵ月、以後もたびたびネパールを訪れサポートした小倉氏も目を細める。

ネパールに携わるようになり数年後には麻酔科標榜医を取得した。国際医療協力に不可欠と感じたからだという。

99年からは非常勤へと勤務形態

ながら活動を続けることは難しかったのです。現在は、2つの病院で診療するかたわら、麻酔科医としても勤務しています。劣悪な環境下で本当に医療を必要とする人々の存在が私のモチベーションを上げ、医療の原点を教えてくださいます」と力を込める。今後はネパールの病院を、国際医療協力を目指す日本人が学べる場にしたいと考えている。「次は日本に少し還元してもらおうかな」。小倉氏が笑みをこぼした。



上/インドネシアでの活動。右/中国の四川大学華西病院内で。



2003年のイラン大地震に始まり、04年スマトラ島沖地震の津波災害でスリランカへ、06年インドネシア・ジョグジャカルタ地震、そして08年の中国・四川大地震では日本の国際緊急援助隊副団長という重責を担った。相原第二病院（大阪市）の小倉健一郎氏は、常に緊急医療支援の先頭を走っている。しかし、高校時代には医療の道をまったく意識していなかった。「自然や牧場にあこがれ、短大で畜産学を学びました。ただ、海外で人のために働きたいとは思っていません。短大卒業後は青年海外協力

隊員として2年間、フィリピンの農村で畜産学を教えた。大学のあった農村は医療資源に乏しく、貧困にあえぐ住民は遠く離れた病院を受診することもかなわない。そんな地で日常を過ごし、帰国後に「海外にもっと貢献したい」と医師を目指した。

兵庫県明石市内の病院に整形外科医として勤務していた95年に阪神・淡路大震災が発生する。神戸市内ほどではないが被害は大きく、日々診療に追われた。2週間ほどが経過し院内が落ち着いた際は、神戸は市内にいる人たちに任せよう、と、いふ気持がわくわくした。短大卒業後は青年海外協力

小倉 健一郎

（おくら・けんいちろう）



1991年佐賀医科大学（現佐賀大学）を卒業し、兵庫医科大学で研修。93年あさひ病院整形外科、98年相原第二病院整形外科。99年より非常勤に。兵庫県出身。

小倉氏が持っているのは、「AMDAネパール子ども病院」設立10周年を記念し、AMDA兵庫支部が発行した絵本「ありがとうね」。